

佐伯史談

第八十九号

郷土史研究誌
通算第百十一号

昭和四十八年七月十三日

佐伯史談会

妻所 佐伯市大学稲聖寺龍護寺羽柴方

論説

佐藤鶴谷の業績

— その名著「佐伯志」と讃えて —

佐伯史談会

副会長 羽柴 弘

このたび、佐藤鶴谷の名著「佐伯志」が、京都臨川書
度から複製出版され、近日中に予約者には取本があるこ
とになつてゐる。佐伯史談会の取扱いは、僅か三十部位
にしかえだが、市内三書店のまとめた予約と合おせると
その総冊数は三百部をはるかに越えるのではあるまいか。
私は今更のようには、佐伯人士が佐伯の郷土史を思い、こ
の「佐伯志」を高く評価し、佐藤鶴谷に対する忠慕の並
々ならぬことを知つて、驚いてゐる。

ひとくちに「佐伯志」と言つても、大半の方々は手許
に持つてゐるわけがなく、その内容について詳しくご
存知ないであらう。鶴谷が政治関係や新聞事業から手を
引き、佐伯に退隱して豊岡史談会をめぐり、そつぱら郷
土史の研究調査と、執筆出版に没頭の生活をつづけ、大

正三手（一九五〇）にこの「佐伯志」を出版した。その内容
は佐伯の歴史にはじまり、佐伯の地誌、町誌、古蹟名
勝、産業、習俗、社寺等、歴史的にわたつてまとめたま
ので、終戦後皆村氏の「佐伯郷土史」上下二冊の出版さ
れたのを除けば、全く比較するものがない、郷土誌とし
ては決定的文章著作であつた。

しかし今では古書市
門の店にも全く姿を見
ること出来ず、佐伯
の郷土史の文化財の研
究する人々から、ぞい
ぶんほしがられていた
本であつた。これが今
回私共の座右にとせら
れ、日々これに親しま
ることが出来るようにな
つたが、さてこれをど
かようばうけとめて読
むべきであらうか。心
づくままに二三摘記し
てみよう。

第一に、「佐伯志」
は既に郷土誌として以

本号の内容

鏡 佐藤鶴谷の業績（羽柴弘）……………一

— その名著「佐伯志」を讃えて —

鏡 龍溪斎又雄先生伝（山内式顯）……………七

鏡 寛龍公の書翰……………一七

鏡 佐伯城絵図解説（小野英治）……………一八

鏡 横川先生と佐伯（山内保）……………二三

— 郷土の研究 — に答ふもの

鏡 飛瀬照会と瀬所回状（安部）……………二八

鏡 羽出浦産屋文書（川）……………三〇

鏡 六十路の旅（富沢泰）……………三二

— 喜寺から伊豆の蒲子 —

鏡 深島を訪ねて（羽柴弘）……………三六

— 深島資料をそえて —

史談会の働き・集案案以
寄付料・会費領収など

古典である。出版されたのが今から六十年前、その頃の歴史学や地理学のようになっていた時代背景を考へなくてはならない。

次に鶴谷は、先づ明治黎明期の文藝者で、漢学の素養が高かった。そして政治に志し、新聞人として苦勞しているので、物事を歴史的にとらえ、社会事象についての批判が鋭く、洞察力にすぐれたものがあつた。これは大いに学ばなくてはならない。

第三に、鶴谷は正則を歴史学も地理学もやっていた。それでいて文献をよくあさつていて、徹徹に論評を加えている。然し今日のような科学的な究明、実証的な位置づけには、いささか弱さを見せていると言えないであらうか。

第四に、鶴谷の「佐伯志」執筆の頃は、すでに幕末書齋の人であつたように、古文書の蒐集や歴史文献の渉獵ふかく、しかもその取扱いや解釈はまことに堂に入つていて、私どもに佐伯の風土や歴史について、正しい理解と導いてくれている。寧ろ書齋人であつたということとは反面から言えば、実地についての探究、自らの足で追求するという点が弱かつたようである。これは鶴谷が老齢で、かつ足が不自由であつたことによるようである。以上のようなことを念頭にまつて、ある点は鶴谷の御土誌追求の態度にならない、慎重に押さえて行くべきではなからうか。

これらを要約して言えば「佐伯志」は、今を距る六十年程前の著作である。「佐伯志」は伝説・物語でなく佐伯の歴史であり、地理である。だから今日の歴史学でおさえ、地理学で確かめなくてはならない。考古学や地質学で足りない所は補うべきではあるまいか、比喩を用

いて意うなれば、神武紀元でなくて、万国共通の紀元でうけとめなくてはならない。

私もこの「佐伯志」によつて、当地方の先覚者佐藤鶴谷の、郷土誌追求の態度と学問で目なない。

到底鶴谷そのまゝの真似は出来なからうが、せめて鶴谷のこれまでに成し遂げて来た業績をうけつがなくてはならない。鶴谷の到達点から先の仕事をこの私どもが受けつぎ、完実な発展を期すべきではあるまいか。

私はこのように、鶴谷の名譽「佐伯志」によつて、佐伯史談会は前述のような課題が与えられた、と言いたいのである。

なお本文の補足として言いたいことがある。佐藤鶴谷は、昭和十七年二月、佐伯市内所下中島の自宅で、八十八歳の高齡をまへて死去。それからもう三十年たつている。墓は養賢寺裏山、柩蔵所や火葬場に通ずる道近くにある。然し案外一般の人々は知らない。

且つ大々遺著・遺稿があり、その一部分は市教育委員会が持つており、自筆の稿本「南海部郡史」も含まれている。

佐伯史談会は近く機会をめぐり、鶴谷のお墓にまいり、碑を設けて今回出版の「佐伯志」をめぐり、藤田のせ、記念追憶の集いを持たたいと思つて、いかがであらうか。その際は、今回「佐伯志」を購入され、あるいは既に所持されている方々すべてに案内状をさし立てたいと考え

(4) 記

(かわり)

「佐伯志」の字納本、史談会版の幾冊残本あり。希望の方は至急申之入を、郵代金三〇〇。田、遠方の方は送料加算のこと。

